

大館の歴史散歩

戊辰戦跡を歩く ⑧

葉隠の里からの援兵

八月二十六日正午、馬渡作次郎、佐賀良(相良)三郎、山田平蔵、太田哲之助、石山寛之進の五人の斥候が荷上場に着し、佐竹大和に会見、先発の目的を告げるとともに協力を求めた。

馬渡等は、岸慎三、青柳紋治を案内人にして荷上場から本道各間道をくまなく巡回、検分を行った。斥候到着より先に佐賀藩士生野小十郎が田村乾太左衛門の命により到着、佐賀藩応援隊の出発を告げ、中田太郎蔵とともに小繋村中川原に台場を構築したと記録にあるが、生野小

十郎についての詳細は不明である。

八月八日、北部戦線応援の中核となる佐賀藩支藩小城藩応援隊総勢七百十三人(大隊長田尻宮内、監軍藤本恒作、組頭今泉惣左エ門、長崎要人等)が甲子丸ほか一船に分乗して伊万里湾久原から出発した。同月二十一日に船川港外に碇泊し、翌二十二日に上陸、二十四日に土崎湊に本陣を構えた。

一方、田村は二十五日に斥候を出した後、手兵九十余人を前に「二十八日朝まで荷上場へ到着」を厳命し、三十人を率いて総督府参謀大山格之助との会見のため早駕籠を用い、久保田へ急行した。大山と会見の後に九条総督に謁見し、久保田藩鈴木三郎太郎とともに荷上場へ向かった。途中土崎湊の小城藩本陣へ立ち寄り、大隊長田尻、監軍藤本に面会し、総督府からの受命を告げるとともに上級官職の兩人に対し、総督府から北部戦線総隊長の命を受け指揮することとなった旨を告げ、下役である自分の指揮を受けるか否か



荷上場、小繋における撃ち合い
(戊辰戦役絵日記から)

を問、「平時と異なり戦時の事、指揮に従う」との返答を得、兩人に対し、「土崎より荷上場まで二十里二十八日迄に必ず到着すべし」との初の命令を行った。田村が鈴木と手兵を伴い荷上場に着したのは二十七日早朝であった。

到着後、大和に総督府からの命令を伝えるとともに、大館の諸隊長と馬渡等の斥候から報告を受け、茂木隊と小野寺組に米内沢方面の警備を命令、田村は前線視察へ向かった。正午ごろに前線視察から戻った田村は、諸隊長を集め、「此地の形態を観るに秋田への咽喉とも謂える要害なり、敵落し此地を占領しなければ城下に迫ること易々たらん。我之を得ば敵最早前進の念を断

たん。勝敗只此の山に在り」として、二十八日には佐賀藩、小城藩の応援兵が到着することを告げた。

が一堂に会した軍議の結果、明二十九日午前四時を期して本道(前山から坊沢へ)、米内沢口(茂木隊小野寺組と合流、七日市から鷹巣)、大沢口(大沢から綴子へ出て敵の背後へ)の三方向から南部軍への総攻撃の議を決した。

二十九日の総攻撃は午前六時に開始され、勢いに乗った大館佐賀連合軍は、苦戦をしながらも勝利を得て前山、坊沢と進撃し、午後二時には綴子に本陣を構えた。対する南部軍は、川口まで退却し本陣を構え、岩瀬、板沢、中仕田の警備について。

これより、九月二日の岩瀬合戦まで両軍の兵にとつてつかの間の休憩となった。(参考文献 佐賀藩戊辰戦史) 市役所史跡探訪会

私の本棚

中央図書館新着図書

『僕は森へ家出します』

荒川じんぺい 著 岩波書店

都市生活の利便さに慣れ親しんだ著者が、ある日、森に住むことを決意する。森に建設した山小屋をベースキャンプに森林散策など自然を満喫する方法を教えてくれる。



- ◇過ぎゆく日暦 (松本清張)
- ◇ロートレックの処刑台 (中川裕朗)
- ◇跳躍台 (小川国夫)
- ◇魔都上海オリエンタル・トパーズ (山崎洋子)
- ◇砂のアラベスク (泡坂妻夫)
- ◇闇から覗く顔 (高橋克彦)
- ◇カリオパイアの指 (仲谷和也)
- ◇ドイツ民主共和国 (本多勝一)
- ◇医者目の涙 (石川恭三) ほか

- ◇シマウマだけドウサギ (本信公久)
- ◇山下泰裕の楽しい柔道 (山下泰裕)
- ◇世界人権宣言 (谷川俊太郎)
- ◇こどもたちのオーケストラ入門 (矢吹申彦) ほか

10月のテーマ関連図書コーナー
『環境保護』
親子読み聞かせ会
毎月第1金曜日 午後2時30分から
中央図書館の休館日
11月18日、22日、23日、12月16日